

社団法人私立大学情報教育協会
平成 21 年度第 1 回 CCC 芸術系グループ運営委員会 議事概要

- I. 日 時： 平成 21 年 5 月 8 日（金）午後 5 時から午後 7 時
II. 場 所： 私情協事務局会議室
III. 出席者： 小川委員(ネット参加),有馬委員,久原委員,西垣委員,宮田委員(ネット参加),
井澤委員
井端事務局長、事務局山野上

IV. 検討事項：

1. 学士課程教育策定に関する動向および学士力の詳細設計の進め方について

井端事務局長より、前回委員会を開催した昨年 10 月以降の学士課程教育に関する動向について説明があった。

まず当協会では、サイバーFD 教員の意見を踏まえながら本グループを含む 24 学問分野で学士力を取りまとめ、文部科学省に提案を行った。本学士力は多数の現場の教員の意見を反映させたもので、日本学術会議とはまた別の視点が反映されており有効に活用されることを望んでいる。本学士力は各学問分野固有で最低限度のもので、職業教育と必ずしも一致するものではない。本学士力を実現性あるものとするため、今後はコアカリキュラムのイメージや到達度評価方法等について委員会ごとにまとめていく予定である。

次に日本学術会議では、質保証を行う枠組み作りや教養教育のあり方、キャリア形成教育等に関する分科会を設け、質保証教育について検討を行っている。質保証の枠組みで参考にしているのが英国の QAA という大学団体での取り組みであり、学問分野ごとに身につけるべき知識、能力、スキル、教授法、学習、および評価等の項目から求められる事柄をまとめ、ベンチマークスタンダードを作っている。芸術系教育についても QAA よりとりまとめがなされており、必要に応じて参考とされたい。

日本学術会議の学問分野別審議は本年 8 月より始まる予定である。学術会議の後塵を拝するのではなく、私情協も先手を打って学士力の詳細設計について提案をおこなっていききたい。それには、必要に応じてサイバーFD 教員の意見を得ながら万機公論を尽くすことが重要である。

中教審では、学士課程教育のあり方について 12 月に答申を出した。注目すべき内容としては以下の点が挙げられる。

- ・ キャリア形成教育については、教員がカリキュラムの中でキャリア形成支援に

あたることが求められている。持続的な就業力の育成を目指す。教員が参画してキャリア形成支援にあたる。

- ・ 質保証には出口管理だけでは困難を極める。入口の段階、すなわち、高校卒業時点での学力確保のため、高大接続連携テストを実施し、高校の側に質の保障を一部分を担わせる。
- ・ 共通教育や基礎教育の重要性を考慮し、担当教員を正當に評価する。
- ・ 単位の實質化（授業回数、予習復習時間の確保）や成績評価の厳格化(GPA の實質化)について取り組む。
- ・ 教育方法、学習方法野の改善を行うために、学生参加型の授業や課題探求型授業等の工夫を行う。そこで教員の負担を減らすために TA を積極的に活用したり、IT を取り入れ e ラーニングや双方向授業を展開する。
- ・ 教育支援に貢献する職員の職能開発を推進する。

以上を通して言えることは、教員の専門性と教育力について評価体制を確立し、各大学で社会に宣言することが求められている。

企業からも大学に対して期待すること、企業ができることについて要望が出てきている。学生が学習に専念できるよう、採用試験時期の配慮を行ったり、不合格者への理由説明、大学への採用者の実績をフィードバックすることなどが挙げられている。

2. 学士力の詳細化検討について

座長を決定し、討議に入った。進行方法は前回策定した学士力について、より詳細な内容を付加していくという方式を取った。

検討を行ったところ次のような意見があり、引き続き検討を行っていくこととなった。

- ・ 大学でアートを学ぶ以上は、芸術を通して社会への取り組みに参画することが求められる。
- ・ 「科学の観点から・・・」を説明するにあたり、素材やメディア等への理解について言及する。
- ・ 「感受性に富み・・・」を説明するにあたり、多様な視点や時代を感じ取る能力について言及する。